友の活躍を喜ぶ
～日々の暮らしの中から①～

自治会の回覧の中に「第3回家庭教育学級"個性を伸ばして生きる"講師は和田山企画代表　大橋広宣氏」というチラシがあった。

大橋君とは彼が「日刊新周南」の記者時代からの古い友人である。彼は53歳で、25歳の齢の差はあり、なぜか彼は私のことを「お父さん」と呼んで親しくしている。

彼が日刊新周南の記者を辞めて独立することを聞いた時、故人となられた新周南新聞社常務の橋詰氏が「彼は多彩な才能を持っているから、独立しても大丈夫」と言われたことを思い出す。

久しぶりに我が家を訪れた大橋君

思えば、私が山口放送のラジオの責任者になった時、テレビに比べて弱小メディアであるラジオをどうすれば強化出来るかをいろいろ考えた。そして実行したのは他メディアとのメディアミックス。テレビは社内のメディアであり、社外と言えば、活字メディアの新聞や講演事業との連携である。

一例を挙げると、読売新聞の「クリスマス愛のメッセージソン」やザ・モール周南（当時）のサテライトスタジオ出演者による「KRYかたつむり大学」などである。その際、地域密着メディアの日刊新周南にはいろいろお世話になった。その窓口の役割を果たしてくれたのが大橋君である。

彼はザ・モール周南のテーマソングを作曲したり、ザ・モールからのラジオ番組に出演して映画の話をしたり、とにかく驚くほど有能で多才。その彼の口から「自分は発達障害がある」と聞いてびっくりした。

多才な彼が発達障害という理由は、やや通常の人に比べ、計算能力に障害があると言う。私はこんな人を障害者とはとても呼べないと思う。現代では、計算などは電卓で誰もが処理している。

それよりもっと酷い車椅子での生活を強いられているこの「巡礼の道」をホームページに転載してくれている壮年の友も、私は障害者とは思わない。

人間には誰もが発達障害の一面があり、今や、障害も一つの個性と言われる時代である。案の定、大橋君は独立して「和田山企画」を立ち上げ、立派な実績を残している。

教育委員会で働いている長男は「大橋君の講演を聞いたが、実に話がうまく、内容も良かった」と話していた。PTAの仕事をしている次女も「大橋君はPTA会長として長年活躍し、各地で講演活動をしているが、評判が良い」と言っていた。

それ以上に私が彼を尊敬するのは、4人の子供がいるのに、長年腎臓病で苦しみ、4年以上、自分で食事療法をして人工透析を延期させたことだ。さらに人工透析をするようになり、その後、奥様の腎臓の一つを移植して見事に回復し、和田山企画を守り、子育てを夫婦でしていることである。

先日、久しぶりに我が家を訪れた大橋君は、忙しい中、3時間も私の腎臓病の食事療法について体験をもとにいろいろ指導してくれた。

その時、私は自分の発達障害の体験を交えての「個性を伸ばして生きる」も良いが、自分のもう一つの体験に基く「腎臓病といかに共生するか」を話したら良いと提案したほどである。

9月20日、久保小学校の体育館で開かれた講演会も聞きに行ったが、これから子育てをする人にはぜひ聞いてほしいと思った。私は彼の活躍を心から喜ぶ者の一人である。

最後に、一見、意志が弱いように見えるのに強靭（きょうじん）な意志で腎臓病に対峙（たいじ）した力はどこから来るのかと尋ねると「妻から腎臓を一つもらい、子供たちも自分を支えてくれていることに感謝して祈るからだ」と言う。

これを聞いて私ももっと祈りを大切にし、彼を支援しようと思った。